

ジェイムズ多元主義の地平

——シエストフとシュミットのあいだ——

嘉指 信雄（広島市立大学）

The Horizons of Jamesian Pluralism

— *Between Shestov and Schmitt* —

Nobuo KAZASHI

The far-reaching relevance of William James for contemporary thought is widely recognized notably over the questions of stream of consciousness, pure experience, pragmatism, and pluralism. This paper brings into relief anew the contemporary significance of Jamesian thought, particularly that of his pluralism, by considering the distinctive ways his works were read and criticized by Lev Shestov during pre-revolutionary Russia and Carl Schmitt during Nazi Germany.

According to *William James in Russian Culture* (2003), strong interest in James was awakened in Russia as *The Principles of Psychology* (1890) was introduced, but it was when *The Varieties of Religious Experience* (1902) and *Pragmatism* (1907) appeared in translation in 1910 that James became an object of intense debates. And it was Shestov who responded most enthusiastically to James' pluralistic stance, but finally with a critical appraisal because he could not endorse pragmatism. We also note that, seen from James' side, Tolstoy remains a relevant figure because of James' questioning over the "moral equivalent of war."

In contrast, as shown by recent scholarship, James' pluralism drew Schmitt's critical attention because of its "liberal" emphasis on "plurality" as opposed to the antagonistic "friend-enemy" relationship posited by Schmitt as the fundamental "political notion." While confirming the one-sided nature of Schmitt's arguments, we highlight the question of "decision-making in exceptional situations" as the aporia that has come to the fore in the recent wars and the global division over the TPNW (Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons).

Keywords: sick souls, Tolstoy, the moral equivalent of war, democratic governance, nuclear weapons

キーワード: 病める魂、トルストイ、戦争の道徳的等価物、民主的統治、核兵器

はじめに¹

事物を實際上連続させる途は […] 数えきれぬほどある。 […] 諸君の宇宙の統一性はそれらの根本的な誘導線によって組み立てられている²。

私たちの宇宙は、現れているままの姿を見ると、広大な混沌である。単一な型の連結が、それを構成しているあらゆる経験を貫いているなどということは決してない。 […] 根本的経験論は、 […] 統一および断絶の両者に対して公平である³。

倫理的にみて、人本主義の多元的形態は、私からすると、私の知るどんな哲学よりもはるかに強力に、現実を把握している——それは、本質的に一つの社会哲学であり、共同 [co-] の哲学なのであって、そこでは接続的關係が効力を現している⁴。

ウィリアム・ジェイムズは、「純粹経験の哲学」は存在論的多元主義を帰結すると見なすとともに、「多元的な意味領域」の形成を通ずる「断絶」から「連接」への漸次的移行に社会哲学的意義を読み込んでいく。アメリカ哲学は、プラグマティズムの系譜に限っても、帰結重視、可謬主義、偶然性や創造性の強調など、家族的類似を示す様々な特徴の織り合わせからなるが、本稿では、ジェイムズの多元主義に焦点をあて、その地平の広がり意義を再考する。

ジェイムズ哲学の多様な受容・展開は、ベルクソンやフッサール、西田や漱石、さらにはホワイトヘッドやユングなどとの関係からも広く知られるところであるが、本稿では、ウィトゲンシュタインやジャン・ヴァールなどによって展開されたその「多元主義的ビジョン」の意義を、従来論じられることのほとんどない「シュストフとシュミットによるジェイムズ多元主義への応答」を通じて考察する⁵。

最後に、「アメリカ合衆国」[the United States of America] の理念を、「多と一」、「統一」をめぐる問いとして捉え直し、核テクノロジーによる「民主的統治の変容と危機」に光を当てる。

¹ 本論文は、ハイデガー・フォーラム第17回大会（2021年9月18日、東京大学本郷キャンパス）で発表した「多元的現実論の射程——ロシアのジェイムズ／中国のデューイ」に基づくが、紙幅の制約上、デューイに関連する部分だけでなく、前半部分で取り上げた、ジェイムズ哲学の生成過程における重要な契機となった父親によるコスモポリタン教育、画家になるべく受けたトレーニングや精神的危機の経験の意義などについては割愛した。関連拙稿（「根本的経験論、もしくは方法的エポケーなき現象学——ジェイムズにおける“存在と無”の問い」『現象学年報』第11号、日本現象学会、1996年、218-226頁）、「若きジェイムズにおける現象学的領野の開示（1）——『存在論的驚異症』と『生への還帰』」[『愛知』No.19、神戸大学哲学懇話会、2007年、35-56頁]、「『経験と論理』をめぐる呼応と交差——西田幾多郎／京都学派と古典的プラグマティズム」[『哲学雑誌』808号、哲学会、2021年、81-111頁]）などを参照していただけたら幸いである。

² ウィリアム・ジェイムズ『プラグマティズム』榎田啓三郎訳（岩波文庫、1978年）102頁。

³ ウィリアム・ジェイムズ『根本的経験論』榎田啓三郎・加藤茂訳（白水社、1978年）48-49頁。

⁴ 同上書、165頁。

⁵ ティボー・トゥロシュー「多元主義的〈闘争の技法〉としてのプラグマティズム——ウィリアム・ジェイムズからジャン・ヴァール／ドゥルーズへ」嘉指信雄・小嶋恭道共訳（『思想』1134号、2018年9月、岩波書店）79-92頁。

1. ロシアのジェイムズ ——レフ・シェストフと「病める魂」

『ロシア文化におけるウィリアム・ジェイムズ』[*William James in Russian Culture*]と題された論集（2003）へのイントロダクションにおいて編者は、「ロシアでのジェイムズへの関心は、1890年代の初めに芽吹き、その後ピークを迎え、そして、スターリンの台頭とともに地下へと概ね押しやられた。ソヴィエト時代のほとんどのあいだ、ジェイムズは受け入れ難いものであり、当局の見解では、アメリカ資本主義の単なる操り人形として告発され、「ウォールストリート・プラグマティズム」として風刺された」⁶と述べた後、次のように続けている。

ヒラリー・パトナムはその優雅な小著『プラグマティズム』で、「ウィリアム・ジェイムズは、消え去ることの決してない存在である」と述べている。ポスト-ソヴィエト時代の1990年代のロシアにおけるジェイムズ復興は、それがロシア人たちにとっても当てはまることを示している。『宗教的経験の諸相』、『信ずる意志』、『プラグマティズム』は再刊され、いくつかの小編も初めて翻訳された。ソヴィエト時代に歪められ、貶められたジェイムズのあと、読者は「さまざまな発見へと導く豊富なアイデア」を再発見しつつある⁷。

現在、ジェイムズを含めた欧米の哲学者・思想家がどのように受容され、議論の対象となっているのかについては推測の域を出ないが、本稿では、まずは1世紀ほど前に遡り、ジェイムズがロシアで初めて紹介された頃の状況を確認しておこう。ランダル・A・プールの論考によれば、*The Principles of Psychology* が出版された1890年以降、その書評などがいくつか書かれたものの、1907年に*Pragmatism* が出版されるまでジェイムズはそれほど注目を呼ぶことはなかった⁸。しかし、「1910年にロシア語訳で『プラグマティズム』と『宗教的経験の諸相』が現れた時、ウィリアム・ジェイムズの名前は激しい議論と論争の中心となった」。そして、ジェイムズ思想に最も強く応答した一人が、後に日本でも「不安の哲学」論争を引き起こすことになるレフ・シェストフだった。ジェイムズが亡くなった1910年の翌年に書かれたエッセイ「宗教的創造性の論理 ——ウィリアム・ジェイムズの思い出に」⁹は、次のように始められている。

ウィリアム・ジェームスが死んだ。我々の最も謎めいた現代人の一人であった彼は、一体どう言う人であったのか？ 学者であったと言うべきか？ たしかにその通りに違いない。彼は死後に二巻本『心理学の基礎』を残し、それは万人によって、科学への最大の貢献だと見なされている

⁶ Joan Delaney Grossman, "Introduction," in *William James in Russian Culture*, ed. by Joan Delaney Grossman and Ruth Rischin (Lexington Books, 2003) p2.

⁷ Ibid., p. 2.

⁸ Randal A. Poole, "William James in the Moscow Psychological Society: Pragmatism, Pluralism, Personalism," in *William James in Russian Culture*, pp. 132-133.

⁹ レフ・シェストフ『文芸の哲学 ——シェストフ選書 第7巻』植野修司訳（雄渾社、1975年）では、「宗教作品の論理 ——ウィリアム・ジェームズの思い出に」と題されているが、本稿では、ブライアン・ホロヴィッツの論考 [Brian Horowitz, "Lev Shestov's James: A Knight of Free Creativity"] で使われている英文タイトルに基づき、「宗教的創造性の論理 ——ウィリアム・ジェイムズの思い出に」としておく。

からである¹⁰。

続けて、「彼は科学の敵であったのか？ そう尋ねられても、やはり、敵であったと答えざるを得ないであろう。[...] では、彼は信心深かったか？と尋ねてみよう。やはり、信心深かったと言わざるを得ない」と続けたあとシェストフは、ジェイムズがとった多元主義的スタンスの含意を次のように指摘している。

哲学的及び神学的なあらゆる理論構築の基本的な罪は、何処にあるのかを、もしも彼が人に尋ねられたとしたら、おそらく、彼は次のように答えたことであろう。即ち、この全宇宙的な生命の動きを、一つの理念に納めてしまってやろうとする、絶えざる志向にこそ、その罪があるのだと¹¹。

そしてシェストフは、「知恵と狂乱」と題された節で、制度的宗教を擁護するドイツの神学教授などによって激しく拒絶された『宗教的経験の諸相』の特徴と意義を次のようにまとめる。

[...] みずからをミルの弟子だと呼んでいるジェームスは、実に大胆な試みをやったのけようとする。彼は狂気の中に創造の力を見つけようと試みるのである。彼はアブノーマルな人間たちの体験に関する資料をかき集める。「真理」であると呼ばれるにふさわしい結果を、我々の思考が与えて呉れるためには、知的能力の明確な状態が要求されるのだと、主張する権利を我々は絶対に持ってはいない——そう言う考えから、彼は出発したのである。

そして彼は、もっと先へ進む。彼の意見によれば、こうである。即ち、その人の知的能力の状態が、精神病医たちに最も信頼されることの少ないような、まさにそう言う人物こそ、最も大きな成果を手に入れてきたのであると言う。ノーマルでないと言うことは、ジェームスの意見によれば、最も重要で最も価値高い真理を把握するための条件なのであった。

この様な考え方は、ジェームスの出現する既に半世紀も前に、ロシア文学の中でドストイェーフスキーによって語られたものだったことを、私は既に他の場所で述べたことがある。その思想は、ドストイェーフスキーの特征的才能であった根気強さのありつたけを傾けて、創作文芸として具体的に語られたものであった。ドストイェーフスキーの描く人物は、すべて——いや、ほとんどすべて——アブノーマルな人間たちであった。少なくとも、彼の作品の中で面白いのは、狂人たちか、或は半狂人たちだけであった。最近にあって、この同じ現象が見受けられるのは、イプセンである。

イプセンの晩年の作品の登場人物たちが、アブノーマルな人間たちであることは、既に誰知らぬものもない有様である。[...]

ジェームスはその著『宗教的体験の多様性』の中で、ドストイェーフスキーとイプセンとをお手本にしていたのであった。このアメリカの哲学者の最も注目すべき、最も冒険的な点は、おそ

¹⁰ 同上, 243 頁.

¹¹ 同上, 247 頁.

らく、ここにあると言うべきであろう¹²。

シェストフによるジェイムズの読解・評価は、ドストエフスキーとイプセン¹³に重ねてなされているところにそのロシア的土壌が表れていて興味深い。しかしながら、ブライアン・ホロヴィッツも、「現代の研究者にとって、シェストフによるジェイムズ解釈はジェイムズの方考え方を単純化し、自分に都合よく扱っているのは明らかである」¹⁴と論じているように、シェストフの議論は、非常に一面的で、偏ったものだと言わざるをえない。確かに『宗教的経験の諸相』においてジェイムズは、狂気と紙一重の「病める魂」のありようを描き出し、通常の日常生活の枠には収まらない「ノーマルではないこと」に大きな意義と可能性を見出していたが、ただ単に「狂気」を称揚したのではなかった。

そもそもドストエフスキーの世界にしても、イワンやスタヴローギンなど、世間的な価値観からすれば大きく逸脱した極端な思想と性格の登場人物だけでなく、アリョーシャやムイシュキンなど、同じく平均的な人間像からは懸け離れているにしても、「美しく無垢な魂」を具現する人物たちがいなければ成り立たないものであるし、ミハイル・バフチンのポリフォニー論によれば、そうした種々様々な思想と性格に駆られた人間たちが織りなす対話と関係にこそ、その核心と魅力はある¹⁵。

またジェイムズの『宗教的経験の諸相』に関しても、「空の空なるかな」といった「無明」をくぐり抜けた後に初めて、世界を肯定し享受しうる境位に至る「回心」や「二度生まれ」の契機を視野に収めてこそ、副題として添えられている「人間性の研究」が意味を持つてくるとも言えよう。加えて、その行論の途上にあつて重要な位置を与えられているのはトルストイの「病める魂」の遍歴とその回心（conversion）の経験なのであるが、シェストフによる考察からはこうした側面がまったく抜け落ちてしまっている¹⁶。

¹² 同上, 268-270 頁。

¹³ シェストフが評価するイプセンは、『人形の家』のイプセンではなく、「自分自身と何かある神秘的な内面のことがらとに、全く心を集中してしまっている」晩年のイプセンである。「もはや […] 人類を導こうなどとは思わない。 […] 女性問題だとか、政党の争いだとか、そんなものも、また、彼の心を占めることがなく」なったイプセン。「人間における最も重大なものは、何処から来たのかもわからず、何処へ消えて行くのかもわからないのだ」と考えるイプセンである。『文芸の哲学』には、ジェイムズ追悼エッセイの数倍の長さに及ぶイプセン論「勝利と敗北 ——ヘンリッヒ・イプセンの生涯と創作」が収められており、訳者の植野は「あとがき」において、「ドストエフスキー、ニーチェ、トルストイ……彼が取りあげた作家論の中で、最も筋道を立てて、最も容易に、私たちが彼の思想的頂点へ導いて呉れるのは、やはり、このイプセン論であるに違いない。そしてまた、このイプセン論は、世界の文芸批評の中でも、きわ立ってユニークなものであらうと思われる」と評している（上掲書、284 頁）。

¹⁴ Brian Horowitz, “Lev Shestov’s James: “A Knight of Free Creativity”,” in *William James in Russian Culture*, op. cit., p. 166.

¹⁵ ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳（ちくま学芸文庫、1995 年）。

¹⁶ 『宗教的経験の諸相』の「病める魂」の章に、フランス人憂鬱病患者の手記として挿入された下掲の一段はジェイムズ自身が経験した精神的危機を描いたものだが、現在のジェイムズ研究では広く知られているこの事実をシェストフが知ることができたなら、シェストフの理解は大きく異なった、少なくとも、より多層的なものになっていたのではなかろうか。長い引用になるが、重要な点なので引用しておこう。

「こうして、哲学的な厭世主義の状態におちいり、将来の見通しについてすっかり気持ちが陰鬱になっていた頃のある夕方のこと、私はある品物を取るために、薄暗がりの衣裳部屋へはいつていった。その時突然、何の予告もなしに、まるでその暗闇から現われたかのように、私自身の存在に対

2. プラグマティズムへの異議

シェストフによるジェイムズ追悼エッセイは、日本語訳にして三十数頁の長さのものだが、結論にあたる「五、逆戻りの果てに」でシェストフは、ジェイムズが自らの哲学的立場とした多元主義の可能性を、「利益」と「社会的承認」を最終的な価値基準とするプラグマティズムの原理によって閉じてしまったとして、以下のように結論づけている。

人間をして自由に物を創造せしめるがよい。あらゆる創造をして、常にみずから自己を正当化せしめるがよい。[...] ジェームスは譲歩もしないし、降参もしない。如何なることがあろうとも、決してもとの古い立場には戻らない・・・ように見受けられた。しかし、ジェームスは、いわれなく、自分をミルの弟子であると名乗ったのではなかった。其処には、アングロ・サクソンの素質——もし、そう言いたいのなら、ヨーロッパの素質——が物語られていたのである。自由な創造の勇士であったジェームスは、結局のところ、自分の説く狂乱のために、批准、即ち社会的承認を要求していたのであった。 [...]

「承認されること」を追い求め、大多数の賛同を追い求めているうちに、このアメリカの哲学者の自由を求める夢は、色あせてしぼんでしまったのである。群衆を支配する力を手に入れるために、彼は真理の「狂乱」を拒んだ。 [...]

ジェームスが、結局のところは、狂乱に背中を向けてしまって、英邁なる利益を求めて歩いてしまったことを、果たして人は非難し得るであろうか？ おそらく非難できないであろう。

しかしながらプラグマティズムは、[タレス]¹⁷の墮罪の故に、ひどい報いを受けている多くの人々の共通の運命を、まぬがれ得なかったことは、明らかである¹⁸。

する身の毛もよだつような恐怖心が私を襲った。それと同時に、かつて保養所でみたことのある癲癩病患者の姿が、私の心に浮かんできた。[...] もしかすると、あの姿が私なのだ、と私は感じた。 [...] それ以来、宇宙は私には全く一変してしまった。毎朝毎朝、私は、みぞおちにぞっとするような恐ろしさを感じながら、そして、私がある前にも知らなかったしその後でも感じたことがなかったような、生についての不安感を覚えながら、眼を覚ました。それは啓示のようであった。そして、そういうじかの感情は消え去ったけれども、その経験によって、それ以来、私は他人の病的な感情に共感できるようになった。その経験は次第に色褪せていったが、数ヶ月というものは、私は一人で暗闇の中へ出かけることができなかった。[...] 人生の表面の下に隠されているあの不安の奈落に気づかずに、どうして他の人々が生きていられるのか、どうして私自身がこれまで生きてきたのか、と不思議に思ったことを、私は覚えている。ことに私の母が、たいへん陽気な人で、危険を意識しないのは、私には全くの謎のように思われた。しかし、私自身の精神状態の秘密をもらして母の気持を乱さないようにと、私がたいへん用心したことは貴方にも十分信じていただけるだろう。

私のこの^{メラノコリア}憂鬱症の経験には宗教的な意味がある、と私はいつも思っている。[...] これ以上実例を示す必要はない。私たちが考察した例で十分である。その実例の一つは、死滅する事物の空しさを、もう一つは、罪の感じを語っている、そして残る一つは宇宙の恐怖を述べている。——そして、それら三つの道のどれをとっても、人間の生まれながらの楽観主義と自己満足とが塵にも等しいものになってしまうのである」(ウィリアム・ジェイムズ『宗教的経験の諸相』梶田敬三郎訳 [岩波文庫, 1969年] 242-244頁)。

¹⁷ 植野訳では「ファレス」となっている。なお、「タレスの墮罪」とは、タレスが「万物の根源は水である」と説いたことではなく、「万物の根源」として「唯一の根源」を求めるその問い方にこそ根本的な問題がはらまれていたとの謂いである。

¹⁸ 『文芸の哲学』前掲書、275-281頁。

「実用主義」や「道具主義」とも訳されたことのある「プラグマティズム」が、実存主義の系譜に属するシェストフにとって否定的な意味合いしか持ち得なかったのは理解に難くないが、「群衆を支配する力を手に入れるために、彼は真理の『狂乱』を拒んだ」といった決めつけ方は、やはり、ジェイムズの思想を甚だしく単純化・歪曲化したものとも言わざるを得ない。それは、まさにジェイムズにとっての「実存」が賭けられた、「病める魂」をめぐる問いの核心を捉えそこなっているという意味においても¹⁹、また、次節で詳しくみるように、ジェイムズのプラグマティズムは、社会哲学・政治哲学としては、「群衆を支配する力」を目指したものなどではなく、それどころか、「人間性における盲目」²⁰にこそ留意し、異なる見方・立場を調停し既存の体制的なあり方を創り変えてゆくところにこそ、その特長があることを見ていないという意味においてもそうである。約言すれば、かたや宗教的問いに重心を置く“tender-minded”と、かたや経験的現実を重視する“tough-minded”のあいだの「調停のための方法」として提唱されたジェイムズ流プラグマティズムそのものが、「病める魂」と社会的現実とのあいだに張り渡された多元主義的視座を備えたものであり、ジェイムズにとっての「利益」あるいは「価値」とは多元的・多層的なものとしてあったことを強調しておこう。

この点に関しては、1930年代の日本で起きたいわゆる「シェストフ論争」において三木清がシェストフ的不安について理解・共感を示しつつも²¹、社会的問題に取り組む「新たな行動的人間のタイプ」を形成する必要性を説いていたこと、そして、未完に終わった『構想力の論理』の「第四篇 経験」において、ジェイムズやデューイのプラグマティズムの可能性を改めて検討していたことは、シェストフによるジェイムズ批判及びプラグマティズム批判の一面性を逆に浮かび上がらせるものとなっていると言えよう²²。

¹⁹ この意味においては、ウィトゲンシュタインの場合、「自分の言っていることはプラグマティズムに聞こえないか」と懸念しつつも、『宗教的経験の諸相』の著者のことを「よき哲学者」として友人に薦め、哲学的対話のための格好のテキストとして『心理学原理』を尊重し、読み続けたことが思い起こされよう。ラッセル・グッドマン『ウィトゲンシュタインとウィリアム・ジェイムズ』嘉指信雄・岡本由紀子・大厩諒・乗立雄輝訳（岩波書店、2017年）を参照されたい。

²⁰ 「干渉してはいけません。どの観察者も、それぞれ独自の立場から、ある点では他人よりすぐれた洞察を得るものですが、誰であろうと、ひとりの観察者に、真理や善のすべてが啓示されることはないのです。牢獄や病室のなかですら、独特の啓示は与えられるものです。ひとりひとりが自身に授けられているチャンスを大切に、己の授かった恵みをできるだけ活かすことです。間違っても、広大な他者の世界を大胆にも規制しようなどしてはなりません。それさえ守れば十分なのです」（スティーヴン・C・ロウ『ウィリアム・ジェイムズ入門』本田理恵訳〔日本教文社、1998年〕84-85頁）。

²¹ 三木清（1934年）「シェストフ的不安について」（『三木清文芸批評集』大澤聡編〔講談社学芸文庫、2019年〕所収）。また三木は、1934年刊行の改造社版『シェストフ選集 全二巻』の監修者にもなっている（赤松常広「三木清における技術の問題」〔『人文科学論集』17号、信州大学文学部編、1983年〕35-44頁などを参照）。

²² 「シェストフ論争」には、亀井勝一郎、小林秀雄などとともに広津和郎も加わっているが、広津は、「シェストフ的不安」や「人生の不条理」を当然の前提としつつも、社会的・政治的に困難な時代にあって、「どんなことがあっても、めげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観せず、樂觀もせず、生き通してゆく精神」として「散文精神」を説いた。実存と社会的現実の両極を見据えた、ジェイムズや三木の立場にも一脈通ずる論だといえよう（綾目広治「不条理をめぐる論争から——シェストフ論争と『異邦人』論争」〔『昭和文学研究 第65集』笠間書院、2012年〕などを参照）。

3. トルストイと「戦争の道徳的等価物」

ジェイムズの「戦争の道徳的等価物」(The Moral Equivalent of War) (1910) は、戦争に訴えることなしに、人間社会は、その政治的統一と市民的徳、そして感性的高揚をいかに維持・促進できるかを問いかけた講演・エッセイとして知られる²³。ジェイムズが『宗教的経験の諸相』においてトルストイの「二度生まれ」の経験の考察に重要な位置を与えていることはすでに言及したところだが、ジェイムズは同時代人であったトルストイの平和主義思想もきわめて高く評価している²⁴。両者の関係は一方的なものだったようだが、アンドリュー・ワハテルが指摘しているように、平和主義者を自認していた二人がそれぞれの祖国でともに重んじられていたのは、それぞれの政府の好戦性を公然と非難することができていたからだった²⁵。

トルストイは、1904年の日露戦争の際に書いた「立ち止まって考えよ」と題された呼びかけにおいて、「またも戦争。またしても、まったく不必要で、まったく求められていない受難、またしても嘘、またしても全般的麻痺、そして人間の残忍さ」と書きつけ、慨嘆している。一方ジェイムズも、1898年の米西戦争の際、「我々は皆、圧倒的な奔流に流されてしまっている。しかし、我々が流されてしまっているのは、覚めてみれば、そして有体にいえば、文字通り強奪的だと表現するしかない無謀行為である」と断じている²⁶。

しかしながら、ワハテルの論考の主眼は、両者の平和主義を今一度確認することではなく、そのサブタイトル「晩年のトルストイのフィクションにおける暴力」が示唆しているように、晩年のトルストイが抱えていた「内なる暴力との闘い」に光をあてることにあった。ワハテルによれば、とりわけ、トルストイが推敲を重ねながら遂に生前に出版されることはなかった中編「ハジ・ムラート」には、「ロシア人とコーカサスの山岳部族、そして山岳部族自身のあいだでの殺戮と戦闘のシーンが満ちている」にもかかわらず、「驚くべきなのは、物語のなかで暴力が描かれるとき、トルストイ自身の反感と嫌悪を表明する道徳主義的な声がまったく不在であることだ」。ワハテルは、「この物語のなかで最も価値あるものとされており、著作の紛れもない動機となっているのは、ほとんどニーチェ的ともいえる、生命力それ自身の讃美である」とまで言っている²⁷。

回心後にトルストイが表明していた戦争と暴力への断固たる反対を考えると、「ハジ・ムラートによって、そしてハジ・ムラートに対して犯される暴力を非難しようとはしないトルストイの姿勢はどのように説明しうるだろうか？」という問いを前にして、ワハテルは次のように考える。トルストイの偉大なフィクション作品は、もちろんそれ自体として読むことができるが、「より豊かな読解が可能となるのは、彼の作品は一般的にいてジャンル間の対話によって特徴づけられていて、単一のジャンルに属するように思われる作品

²³ このエッセイは、1906年にジェイムズがスタンフォード大学で行った講演に基づく。

²⁴ トルストイは1828年生まれでジェイムズは1842年生まれだが、両者共に1910年に亡くなっている。

²⁵ Andrew Wachtel, "The Moral Equivalent of War: Violence in the Later Fiction of Leo Tolstoy," in *William James in Russian Culture*, op. cit., p. 83.

²⁶ William James, *Essays, Comments, and Reviews* (Harvard University, 1987) p. 155. Quoted by Wachtel, *ibid.* p. 83.

²⁷ Wachtel, *ibid.*, p. 87.

も、異なるジャンルの独立した作品〔エッセイなど〕によって、ほとんど常に、反対の観点から問いただされていることを認識することによってである」と。これは、トルストイの小説世界は、基本的にはすべての登場人物を操る著者の視点から描き出されている「モノフォニック」なものであるのに対して、ドストエフスキーの小説世界は、対話と問いかけの論理によって展開する「ポリフォニック」なものだとする、上述のよく知られるバフチンによる対比を考えると²⁸、大変興味深い視点を提供するものだと言えよう。ワハテルは、その論考を次のようにまとめている。

ジェイムズのみならず、非常に多くの人々によって崇敬されていたこの平和主義の聖人は、自分自身の熱い血を完全に鎮めることは決してできなかった。暴力一般、とりわけ戦争に焦点をあてたフィクションを書くことによってこそトルストイは、彼の闘争的平和主義をフィクションではない作品のなかで自由に展開させることができたのであろう。これらの矛盾する衝動は、それぞれ異なるものとして区別されつつも、合わせて見るならば、トルストイ自身のなかで——彼の崇拝者のほとんどからは完全に隠された形で——荒れ狂っていた戦争を示している²⁹。

確かに、コーカサスの雄大な自然のなかで過ごした若き日の回想で始まるこのトルストイの作品——『なんというたくましいエネルギーだろう！』とわたしは舌を巻いた。『人間がすべてを征服し、数百万の草の生命を奪ったのに、この鬼^{おに}薊^{あざみ}だけはなお頑張り続けているのだ』³⁰と語り始められる作品をジェイムズは知る由もなかった。

しかしながら、晩年の講演「人間における或る盲目性について」において、「生命が存在するのと同時に、一步離れたところには、死が存在しています。いつも存在していた美しさと同じの、そのただ一種類の美しさが存在しているのです。昔ながらの人類の闘争と、そしてその闘争の生み出した成果とが併存しているのです」と語っているジェイムズにとって³¹、そして、「抽象的研究の後、ひたすら自然の景色に没入することは、ずっと逆立ちをしていた後で自分の両の足で立つようなものだ。もし可能だったらのことだけど、僕は来年の夏、水彩画を描き始めるように努めてみたい」と若き日に書いていたジェイムズにとり、トルストイが晩年まで抱え続けた複眼的な感性と問いかけは、なんら驚くべきものではなかったのではないか³²。

4. 「政治的統一」をめぐる問い ——ジェイムズとシュミットのあいだで

ボストンの反帝国主義者協会 [the Anti-Imperialist League] 副会長の地位にあったジェイ

²⁸ たとえば、北岡誠司『バフチン ——対話とカーニヴァル』（講談社、1998年）を参照されたい。

²⁹ Wachtel, *ibid.*, p. 91.

³⁰ トルストイ「ハジ・ムラート」工藤精一郎訳（『新潮世界文学 20』新潮社、1971年）770頁。

³¹ ウィリアム・ジェイムズ『心理学について ——教師と学生に語る』大坪重明訳（日本教文社、1955年）253頁。

³² 1872年10月、ジェイムズ30才のとき、小説家として歩み始めていた弟ヘンリーに宛てて書かれた手紙（Ralph Barton Perry, *The Thought and Character of William James*, Vol. 1 (Little Brown, 1935) p. 330）。

ムズは、1898年に米西戦争が起きた際、フィリピン人の内面的独自性を無視したアメリカ政府の強圧的な施策を痛烈に批判する論陣を新聞・雑誌紙上に張っている。なお、第一次大戦へのアメリカの参戦を擁護したデューイに対して、「民主主義の理念によって戦争を正当化するもの」だとしてデューイの教え子ランドルフ・ボーンが激しく批判した際、ボーンはジェイムズの米西戦争批判を引き合いに出している³³。

すでに見たように、シュストフにとってのジェイムズの多元主義の意義は、狂気とも接する、激しい宗教的・実存的な問いへと開かれた経験の地平を認めたことにあったが、その政治的な地平はシュストフには捉えられていなかった。しかし、ロシアのウクライナ侵攻後あらためて注目を集めるカール・シュミットの思想と対比させるとき、ジェイムズの多元主義が政治的地平において有する問いの意義はより際立ったものとなる。

短期間にせよナチス政権に関わった法哲学者として知られるシュミットの代表的著作である『政治的なものの概念』には複数の版があるが、2022年に刊行された権左武志訳（岩波文庫）³⁴には、1927年版、1932年版、1933年版、そして戦後の1963年版と都合四つある版の加筆・変更が一見して分かるよう、各版の異同が太文字で強調された1932年版以降の三つの版が収録されている³⁵。以下、1933年版から、特にジェイムズの多元主義に関わる箇所を確認しておこう。

まず、その代名詞ともなっている「友敵論」で知られるように、「本来の政治的区別」は「味方と敵の区別」³⁶にあると考えるシュミットは、「この区別は、人間の行為と動機に政治的意味を与える」ものであり、「最終的に、あらゆる政治的行為と動機はこの区別に還元できる」と断言し、さらに、こうした「味方と敵の区別は、結合または分離の最も強力な強さを意味している」³⁷と特徴づけている〔強調は訳者によるもので、1932年版と異なる加筆訂正を示す。以下、同様〕。

シュミットにとって「味方と敵」とは、「**隠喩または象徴の話法**として解釈されてはならず」、敵対関係の現象形態としての「戦争」から理解されなければならない。「敵は、競争相手でも敵対者一般でもない。[...] 敵とは、少なくとも場合により、すなわち現実的可能性として**実存のために闘争する人間総体**であり、同様な人間総体に対立する人間総体である。公的な敵のみが敵である」³⁸。さらにシュミットは、「**政治的統一の本質は、統一の内部でこの極端な対立状態を排除する点にある**」³⁹であり、「政治的統一が存在するならば、政治的統一はつねに標準的統一であり、全体的で主権をもつ。政治的統一は「全体的」であ

³³ 北村三子「1919年のデューイと日本」（『駒澤大學教育学研究論集』第26号、駒澤大學総合教育研究部教職課程部門、2010年）5-32頁

³⁴ カール・シュミット『政治的なものの概念』権左武志訳（岩波文庫、2022年）。

³⁵ 『政治的なものの概念』の「訳者解説」によれば、2018年にドイツでも三つの版を比較対照させた版が2018年に公刊されているが、岩波文庫版は各版の「加筆訂正部分を可視化する日本で最初の試み」となっている。

³⁶ 訳者の権左によれば、従来、シュミットの“Freund und Feind”は「友と敵」と訳されてきているが、「友人」とは「誠実と友愛の絆で結ばれた人間相互の私的結びつきであり、「敵」を必要としない」ことを指摘し、シュミットの概念を公的意味における「味方と敵」と位置付けている。

³⁷ 『政治的なものの概念』権左武志訳（岩波文庫、2022年）119-120頁。

³⁸ 同上、124頁。

³⁹ 同上、125頁。

る。というのも、第一に、あらゆる事柄は潜在的に政治的であり、従って、政治的決定に左右されるからである。第二に、人間は全く実存的に政治関与に巻き込まれるからである。政治は運命である」⁴⁰と述べている。

「政治的統一」に定位した議論の片面的な性格が明らかであるが、このあとシュミットは、「国家による政治的統一」を最重要視する自らの立場に反する、「多元主義的」国家論に哲学的基礎を与えたのは「ジェイムズのプラグマティズム」だったと論じる。

人々は、国家内部の経済的結社がどれほど大きな政治的意味をもつかを認識し、とりわけ労働組合が成長し、その経済的権力手段であるストライキに対し旧国家が相当無力だと気づいた時、国家の死滅と終結を早まって宣言した。これは、私の知る限り、1906年と1907年以降初めて、フランスとイタリアのサンディカリストの自覚的教説として起こった。彼らは「多元主義的」国家論を生み出す刺激を与えた。[...] この国家論の哲学的基礎と政治的神学は、「コスモス」と「体系」という最終的統一への欲求が迷信であり、中世スコラ学の残滓だと考えた米国哲学者ウィリアム・ジェームズのプラグマティズムだった。人々は、ここから「多元主義」の構想と政治理論を結びつけた。多元主義は、本質的に自由主義的な思考様式を持つ第二インターナショナルに最も良く適合する。首尾一貫した自由主義にとり、個人という実在のみが存在し、全体としては人類のみが存在する [下線部強調は筆者]⁴¹。

ちなみに一年前の1932年版ではジェイムズは言及されてはおらず、「本質的には主権論本来の政治的意味を捉えそこなった」とされるフランスのデュギーとともに、「少し遅れて英米諸国で現れた、G・D・H・コールとハロルド・J・ラスキのいわゆる多元主義的国家理論」が、「国家の主権的統一、すなわち政治的統一を否定し、個々の人間は数多くの様々な社会的絆や結合の中に生きておりと繰り返し強調する」⁴²ものとして批判の対象となっている⁴³。1933年版においてラスキに代わりジェイムズが引き合いに出される形となっているのはいささか唐突な感も与えるが、多元主義を柱とする「ジェイムズのプラグマティズム」の射程を逆に際立たせる形になっているといえよう⁴⁴。権左が「訳者解説」で指摘するように、「シュミットは、多元性と統一の相反する要求を統合しようとする連邦主義理論の意義を理解できていない」し、「政治的なものの概念は、敵対関係を認識し、恒常化することはできても、敵対関係を相対化し、解消するには役立たない点で、片面的概念なのである」⁴⁵。

⁴⁰ 同上, 138-139 頁.

⁴¹ 同上, 136-141 頁.

⁴² 同上, 40 頁.

⁴³ シュミットが肯定する多元性は、「複数の国家」からなる政治的世界の多元性であり、「国内の多元主義理論の意味は、国民の政治的統一を否定する点にある」と断じている（同上, 158 頁）。

⁴⁴ 伊藤邦武は、ジェイムズ多元主義を現代における多元的世界の構築に相応しい哲学的ビジョンとして強調している（伊藤邦武「終章 現代史の展望」『世界哲学史 8 現代、グローバル時代の知』伊藤邦武・山内志朗・中島隆弘・納富信留編 [ちくま新書, 2020 年]）。

⁴⁵ 同上, 275-276 頁.

5. 「戦争」と「例外状態」 —— 前景化するアポリア

しかしながら、シュミットが投げかけた問い——とりわけ、「戦争」と「例外状態」をめぐる問い——は、ロシアによるウクライナ侵攻のあと一層切迫したものとなっている。

古賀敬太は、「シュミットの政治的なものの概念は「限界概念」であり、戦争や闘争そのものを自己目的化したものではなかった」し、「シュミットを好戦主義者として読むことは、シュミットの誤読である」としているが、同時に、「限界概念」に伴う問題点の一つを以下のように論じている。

シュミットの本来の意図は、そうした例外状況の危険性からいかにして政治的統一を守るかにあったといえよう。しかしながら、政治を例外状況から規定する方法そのものが、結果的に自由主義や多元主義 [の] 批判、そして国家権力の強化を呼び起こさざるを得ないことも事実である。「非常事態」を強調することによって、国内を総動員体制へと駆り立てることも可能となる。またベッケンフェルデが指摘したように、「常態」がたえず「例外」状況というフィルターを通して把握されることによって、「常態」が「例外」状況に転化する危険性がある。これは「限界概念」に伴う問題点の一つである⁴⁶。

しかしながらこの問題は、概念としての「限界概念」に伴う問題点であるというよりは、今や、常態化した「核戦争の危機」に直面する人類にとって抜き差しならない現実と化してしまっている問題である。「例外状態において決断するものとしての主権者」は、ロシアのような全体主義的体制においてだけでなく、残念ながら、いわゆる「民主的体制」を標榜する国家においても決定的な権力を保持しているのが現実である。それは、9.11 同時多発テロ以降のアメリカを中心とした軍事行動においても示されたところであり、核兵器テクノロジーによって前提とされているところでもある⁴⁷。

そもそも、「アメリカ合衆国」[the United States of America] という名称は、アメリカ憲法制定過程で最大の問題となった「多と一の調停」を目指す理念として掲げられたものだが、イレイン・スキヤリーがその著『核兵器君主制 —— 民主主義か滅亡か』で強調するように、核兵器テクノロジーの出現により「民主的統治」は根本から変質してしまっている。

ウィリアム・サムナー は、[ジョン・アダムズへの書簡のなかで] アダムズを「公民の」父として引き合いに出しつつ、「公民」制度としての民兵は、その分配された力のゆえに、「公民」権の

⁴⁶ 古賀敬太「シュミットの政治的なものの概念再考」(『年報 政治学』53 巻, 日本政治学会, 2002 年) 27-28 頁。

⁴⁷ こうした「統治における例外状態の常態化」に関する問題は、周知のように、とりわけジョルジョ・アガンベンなどによって主題的に展開されてきている。他方、ラディカル・デモクラシーを標榜するジャンタル・ムフは、「民主主義政治の種差性は、われわれ／彼らの敵対を乗り越えることにあるのではなく、むしろこの敵対を設定するやりかたの多様性にこそあるのだ。民主主義が必要としているのは、われわれ／彼らの線引きを、現代の民主主義の構成原理である多元性の承認と両立可能なしかたで行うこと」であり、「シュミットとともに、シュミットに抗しつつ」思考すること」を提起している (ジャンタル・ムフ『政治的なものについて』酒井隆史監訳・篠原雅武訳 [明石書店, 2008 年])。

守護神であると述べている。[…]

核時代となり、このかつては美しかった防衛のための構造は、国の何百万人もの市民によってではなく、ひとりの大統領が手にした支軸によって高く掲げられた天蓋、すなわち「核の傘」として描き出されるようになった。[…] このようにテクノロジーの誘惑によって、米国はその革命と憲法によって築かれた基盤から決定的に切断され、それ以降政府は、これらの起源との連続性をことさら注意深く偽って主張するようになった。代表的な例としてミニットマン・ミサイルがある⁴⁸。

独立戦争当時、マスケット銃を持った男たちは、「1分あれば駆けつける民兵」、すなわち「ミニットマン」と呼ばれたが、現代の核弾頭を搭載した「ミニットマン・ミサイル」の主要請負業者は、空軍の公式出版物では、「ミサイルを見せることさえせず、その代わりにライフルを手に持ち、地平線を注意深く見張るアメリカ革命時の有名なミニットマンの像を使った」⁴⁹。こうした民兵のイメージが選ばれたのは、「非常に誤った印象」——つまり、「反軍国主義的で、攻撃的であることには反対で、専制政治に対して怒った時にのみ必ず人々という理想」を新兵器は具現化しているのだという印象を作り出すためだった。「ミニットマン」の実態は、自らを守る民兵団から、大統領が発射ボタンを握る核弾頭ミサイルへとすり替えられてしまっているのだ⁵⁰。

核兵器は「非人道兵器」として、その開発、保有、使用あるいは使用の威嚇を含むあらゆる活動を禁止した国際条約 TPNW [Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons] が、2017年7月、国連加盟国の6割を超える122か国の賛成で採択され、2021年1月に発効した（2023年1月現在、署名しているのは92か国・地域で、批准しているのは68か国・地域）が、核保有国及び「核の傘」の下にある日本を含めた国々は参加していない。ホッブズが論じたように、戦争への構えを保持している状態も「戦

⁴⁸ Elaine Scarry, *Thermonuclear Monarchy: Choosing between Democracy and Doom* (Norton, 2007) p. 130. [イレイン・スキャリー『核兵器君主制——民主主義か絶滅か』嘉指信雄・小泉直子・古賀高雄・大家慎也共訳 [岩波書店, 近刊予定] . Cf. William Sumner, *An Inquiry into the Importance of the Militia to a Free Commonwealth: In a Letter from William H. Sumner to John Adams, With his Answer* (1823) pp. 61, 68.

⁴⁹ Scarry, *ibid.*, p. 131. 「ミニットマン」についての記述は、Gretchen Heefner, *The Missile Next Door: the Minuteman in the American Heartland* (Harvard University Press, 2012) p.131 からの引用である。

⁵⁰ アーレントは、1963年刊行の『革命について』[*On Revolution*]の「序章 戦争と革命」において、「二十世紀の戦争の歴史は、軍隊がこの基本的な[民間人を守り防衛するという]機能をますます実行しえなくなった歴史として語るができるほどである。そして今日、抑止戦略は軍隊の役割を防衛者の役割から、手遅れの、本質的に無駄な復讐者の枠割に公然と変えてしまったのである」と論じている（ハンナ・アーレント『革命について』志水速雄訳 [ちくま学芸文庫, 1995年] 17頁）。

こうした変容をアーレントは、「戦争が消滅してゆく傾向を示す兆候」の一つとして挙げているのだが、森一郎はその近著において、ニーチェの言葉「神は死んだ」を引き合いに出しつつ、「戦争の神は死んだ」とかりに言えるとすれば、それは、古来「戦」に積極的意味を見出してきた人類が、核兵器という最終手段を手に入れたことにより、戦争を意味づけることが総じてできなくなった、という時代認識を表すものである」とし、さらに、「ニーチェは、「神の影」は人類に数千年にわたってしつこく付きまとうだろう、と予告したが、おそらく人類は、死んだ「戦争の神の影」とも、未来永劫付きあっていかなければならない。言いかえれば、核テクノロジーとの何千年にもわたるであろう濃密な付き合いが始まったのが、一九四五年八月なのである」と述べている（森一郎『アーレントと革命の哲学——『革命論』を読む』[みすず書房, 2022年] 17-18頁）。

争状態」にあるとするならば、世界は絶えざる「戦争状態」にあることになる⁵¹。カフカの『変身』が描き出す、ある朝、大きな虫に変わってしまった主人公ザムザの状況は、自らが作り出した核兵器という軍事的身体の鎧に押し潰されそうになっている人類の姿として読むこともできよう⁵²。

「非人道的兵器」という、あたかも「人道的兵器」がありうることを含意するかのような、この奇妙な国際法の概念そのものが、人類は「戦争」そのものを違法化するにはほど遠いことの表れとなっている。地球や人類への取り返しのつかない影響を考慮して核兵器を違法化すべきだとする「人道的誓約」が、人類共通の未来の保障へと向けた約束の力を持ちうるかどうか、核兵器保有国同士のあいだでの「敵と味方」関係が先鋭化している現在、アポリアの打開へと向けた転回ができるかどうか、「民主的統治」の行方がまさに問われている⁵³。

⁵¹ 「戦闘によって争う意志を十分に示しているなら、戦闘と戦闘の合間も戦争なのである」（トマス・ホップズ『リヴァイアサン 1』角田安正訳 [光文社古典新訳文庫, 2014年] 217頁）。

⁵² 嘉指信雄「被曝身体とパワー／権力 ——ポスト・ヒロシマ時代の「見えるものと見えないもの」」（『現代思想 Vol. 37-8』青土社, 2010年）174-185頁を参照されたい。

⁵³ 核兵器問題及び核被害をめぐる現状については、鎌田七男・嘉指信雄監修、森瀧春子・田室武勝責任編集『核のない未来を！ 世界核被害者フォーラム《報告記録集》&《追録：グローバル危機の時代に問い直す》』（世界核被害者フォーラム実行委員会, 2020年）などを参照されたい。